

「ほめ方」・「叱り方」の極意とは？ ～子どもの個性理解～

☆プログラムのねらい

子どもをほめ、叱るのは、その根幹に子どもの健やかな成長と幸せを願う親の思いがあることを再認識し、自分のほめ方・叱り方を振り返りながら、願いが届く「ほめ方・叱り方」について考える。

時間	進め方	準備物等
導入 10分	<p>アイスブレイク</p> <ul style="list-style-type: none"> 指導者の自己紹介などから始めて場を和らげ、温かい雰囲気を作る。 4人程度のグループをつくる。 <p>＜ルールとマナーを確認する＞</p> <ul style="list-style-type: none"> 積極的に参加しましょう。 一人一人の考えや思いを尊重しましょう。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin-left: 20px;"> 最近、ほめられてうれしかったこと。ほめてもらいたい(のに!!)とっていること……など。 </div>	アイスブレイク集
展開 30～ 45分	<p>ワーク1</p> <ol style="list-style-type: none"> 資料から、子どもの成長の各期において、「ほめ方・叱り方」に対する学習ニーズが高いという結果を踏まえ、そもそも、何のためにほめたり叱ったりするのか、自分の考えを書かせる。 記入内容を確認し、紹介する。(可能なら発表させてもよい。) <p>※ 「マニュアル」としてのほめ方、叱り方を知るのではなく、保護者が自分で考えてほめたり叱ったりしながら、子どもとのやり取りを通して、その子どもに合った「ほめ方・叱り方」を獲得していこうとする姿勢が大切であることを伝え、学習の構えをつくる。</p> <p>ワーク2</p> <ol style="list-style-type: none"> 各自記入させる。(恭子の気持ち、まゆの気持ちの両方の視点で。) グループ内で、互いの感想を知り、テーマについての関心を高める。 <ul style="list-style-type: none"> よくある。自分も泣きたい。余裕がないと感情をぶつけてしまう。 まゆは、「自分ができる」ということをほめてほしかったのかな。 <p>ワーク3・4</p> <ol style="list-style-type: none"> 各自記入させる。 <ul style="list-style-type: none"> ※ うまくいかなかったことについては、改善案があればそれも記入させる。 ※ 記入できない方には、うまくいったかどうかにかかわらず、普段、どのようにほめ・叱っているかを振り返って記入するよう助言する。 意見交換をもとに、グループごとに極意をまとめ、紹介させる。 <ul style="list-style-type: none"> ※ うまくいかなかったことから学べる人が多いことを共通理解し、全員が話しやすい雰囲気に心がける。 <p>資料～特別な支援が必要な場合があります～</p> <ol style="list-style-type: none"> 資料を読み、しつけ方が原因ではなく、特別な支援が必要な場合があること、早期発見・早期支援が有効であることを伝える。 <ul style="list-style-type: none"> ※ 「しつけがうまくいかない＝発達障害」との誤解がないよう留意する。 事前に、実施地域の相談窓口を確認しておき、名称や電話番号を紹介したり、講座後に個別の相談に応じたりする。 	<p>ワークシート</p> <p>※可能なら市町村・園・学校等のデータも提示</p> <p>グループの意見をまとめる広い用紙マジック</p> <p>居住市町村の相談窓口紹介パンフなど</p>
まとめ 5分	<p>ふりかえり</p> <ul style="list-style-type: none"> プログラムを通して考えたことを各自書かせ、感想などを発表させる。 <ul style="list-style-type: none"> ※ ファシリテーターからのアドバイスをする場合は、意見の押し付けにならないように留意する。 ※ マザー・テレサの言葉「愛の反対は無関心である。」を紹介する。□の言葉を考えさせてもよい。スキルより関心を寄せることの重要性を確認する。 <p>＜ルールとマナーを確認する＞</p> <ul style="list-style-type: none"> 講座で知り得た個人情報外へ持ち出さないようにしましょう。 	補助資料

※ 時間は必要に応じて調整してください。

「『ほめ方・叱り方』の極意とは？」 補助資料

	ほめ方・叱り方	解 説
場 面	A みんなの前で B ひとりの時に	A 叱る場合、自尊心を傷つける。 B ほめる、叱る、どちらも効果的。 ※ 大勢の前にほめられることを好まない子どももいる。 ひとりの時にほめて、みんなの前でほめてよいか確認を。
タイミ ング	A その時、その場で B 後で	A 嬉しい！と子どもが思っているその瞬間にほめよう。 B 時間が経ってからでは、何が良かったか、悪かったか、覚えていないので、心に響かず、効果がない。 昔のことまで引っ張り出して叱るのはNG。 後でほめよう（叱ろう）と思いながら、忘れてしまうこともある。 ※ 身に危険を及ぼすような時は、「すぐ叱る」必要があるが、そうでない場合は、子どもが何をしようとしているのか、観察してその意図や気持ちを汲むことが大事。子どものケンカも、しばらく様子を見守り、子ども同士で解決できる機会を確保する。ある瞬間や場面だけを見て泣かせた方（泣いていない方）だからとか年上だからという理由で一方向的に叱らない。
頻 度	A しょっちゅう B たまに	A 「しょっちゅうほめる」は、OK。「調子に乗る」「できて当前」と言わずに気前よく。「当たり前前のことが当たり前前」にできる」のも大事な力。 A 「しょっちゅう叱る」は、NG。自信を失い、やる気をなくす。自己肯定感が育たない。「また始まった…」と、真剣に聞かない。 B その子自身が「本当に頑張った。ほめてもらいたい。」と思っているときにピンポイントでほめるなら、たまにでもOK。
内 容	A 過程を B 結果を	A 取り組み方や、努力した点を具体的にほめると、自分のことをよく見てくれているという安心感や喜びが得られる。 取り組み方、努力の程度、具体的な言動を振り返らせ、何が、どのように（どれくらい）問題になっているかが分かるようにする。 B できたかどうかや数字だけでほめる（叱る）と、「ほめる・叱る＝評価する」になる。 「頭がいいね」→失敗して自分の能力を疑われるのを恐れ、新しい挑戦を避ける傾向が強くなる。 「いい子ね」→親の愛情を感じるために、一生懸命「いい子」を演じる。 「ちゃんとしなさい」→何が悪いのか、どうすれば良いかわからないため、同じ過ちを繰り返す可能性がある。

比較	<p>A 他の子と比べて (きょうだいや友達)</p> <p>B 以前のその子自身と比べて</p>	<p>A 他の誰かと比べてほめる→「誰かに勝てばほめられる」と思い、人の目を気にする、攻撃的になる。</p> <p>A 他の誰かと比べて叱る→ひがみやすい子に</p> <p>B 小さな変化を見逃さず、</p>
その他	<p>A 長々と</p> <p>B 短い言葉で</p>	<p>A 何がよくて、何が悪いかや理由を具体的に伝えることは大切だが、長すぎると、真意が伝わらない。~~しないと~~できない</p>
	<p>C 感情にまかせて</p> <p>D 時には体罰も必要</p> <p>E ○○に言うよ</p>	<p>C, D…子どもの心や体を傷つける言葉の暴力や体罰は、憎しみや恐怖心を生むだけで、教育的な効果はない。児童虐待にもつながる。</p> <p>E…脅迫と権力への責任転嫁。「○○に怒られるからダメ」も同様。親としての信念がない。責任・プライドの放棄。</p>
	<p>F 複数で寄ってたかって</p>	<p>F 逃げ場がなくなる。必ず一人はフォロー役になる。</p>
	<p>G 一貫性がない</p>	<p>G ① 昨日と今日で変わる。② 父と母で違う。 →子どもはどうしたらよいか迷い、混乱する。</p> <p>③ 親の言っていることとやっていることが違う。 →親に対する信頼や尊敬の念を抱けない。</p>
	<p>○ 「うれしい」で喜びを共有。「ありがとう」「助かる」は最高のほめ言葉。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「人の役に立てる喜び」は、ごほうびを必要としない健全なやる気や充実感につながる。 <p>○ 「悲しい」「残念」で考えさせる。(共感)</p> <p>○ 「そんな子は嫌い(好き)」でコントロールしない。</p> <p>○ 何も言わずに、ぎゅ~っと力いっぱい抱きしめてほめる・叱るも有効。</p> <p>○ 子どもと視線を合わせる。叱る人が壁側になると、他に興味がいかず集中して話を聞きやすい。</p>	
<p>子どもに関心を寄せ、よく観察し、子どもの思いを汲むことが大事。(「見張る」ではなく、「見守る」)</p>		